

地域活動としてのボランティア活動の可能性

—地域住民と学生ボランティア活動との連携・協働をめざして—

樋下田 邦 子*

はじめに

1. 2008年西濃地域ボランティア学習大会開催まで
 - (1) 大会の目的と方法
 - (2) 大会実行委員会の運営と機能
 - (3) 参加団体の紹介
2. 2008年西濃地域ボランティア学習大会の開催
 - (1) ステージ発表の事例
 - (2) ポスター発表の事例
 - (3) シンポジウム、総括
3. 大会の成果と課題
 - (1) 参加者アンケートからの考察
 - (2) ボランティア学習の三つの側面からの考察
 - (3) 今後の方向性

はじめに

近年、ボランティア活動は、潜在的な学習力を持つものと捉えられてきている。それは、三つの側面があるといわれている。「自己の探求」として学生自身が自己を探求する側面を持つこと、「社会の探求」として社会を探求する側面を持つこと、「学びの探求」として学びを探求する側面を持つことである¹⁾。2000年7月1日の教育振興基本計画では、社会全体で教育の向上に取り組むこととし、学校・家庭・地域の連携・協力を強化し、社会全体の教育力を向上させること、教養と専門性を備えた知性豊かな人間を養成し、社会の発展を向上させることを示している。これは、まさしくボランティア活動の学習機能に期待しているといえるだろう。

2007年の第一回目に引き続き第二回目の西濃地域ボランティア学習大会を開催した主旨は、ボランティア活動には、学びがあること、その学びは人との出会いからスタートしていること、つまり「自己の探求」「社会の探求」「学びの探求」を醸成することであった。

第二回目のボランティア大会は、2007年度の第一回目大会の反省を踏まえて開催した。その反省点として、「地域で活動するボランティア団体を知ることはできたが具体的な連携については、議論されなかったこと」「3会場での発表であったために、じっくり聞くことができな

かったこと」などが挙げられていた。そこで、今回は、発表後の総括をすることやボランティア活動を推進する上での課題や活動団体との連携について議論する場を設けることにした。

本報告は、大会開催に向けてボランティアサークル HIGE☆BU、大垣市のボランティア団体、高校生、障がい者で構成された実行委員会の役割や大会の様子、成果や課題、今後の方向性についてボランティア活動が持つ潜在的学習の3つの側面から考察してみたい。

1. 2008年西濃地域ボランティア学習大会開催まで

第一回大会の反省を踏まえて、第二回大会においては、地域住民と学生ボランティア活動の連携・協働を進めるにはどのような課題があるのかを考える機会にした。地域ボランティア活動の実情を知り、ひとり人間として何ができるのか、どのような繋がりが必要になるのか、参加者が地域課題を共有し、共に一歩前進できる方法を学ぶ大会にしようと準備を進めた。

(1) 大会の目的と方法

ボランティア活動は、他人同士がいろいろな場でふれあい、つながりを持ち、お互いに学びあって生きる喜びを確かめ合う機会を与えるものであり、それが結果として社会の役に立つことになり、豊かで潤いのある社会づくりにつながると考えられている。同時に、ボランティア活動をすることは、さまざまな知識・技術が身につつき、いろいろな問題に直面してその解決方法を見出すこと、他人や自然を慈しむ心が育つなど、ボランティア活動自体が大きな教育効果を持ち、福祉社会を担う人材の育成に寄与するといえる。

ボランティア活動は、自らが楽しみ、自分が

*岐阜経済大学経済学部専任講師

できることを気負うことなく始めることができる。同時に、多くの地域住民と学生ボランティアとの出会いは、地域の状況を把握する機会を得ることができる。

本大会は、昨年に引き続き二回目の開催になる。地域住民、高校生、当事者（障がい者）、HIGE☆BUで構成される実行委員会を結成し、地域活動としてのボランティアの可能性について学ぶことを目的にした。ボランティア活動を推進する団体だけでなく、西濃地域住民と共に、地域状況や地域課題について把握・共有し、新たな活動へのステップになることを期待するものである。

参加対象者

高等学校でボランティアまたは大学でボランティア・地域活動を実践しているグループ、西濃地域の社会福祉協議会ボランティア連絡協議会、NPO活動している団体、社会福祉施設におけるボランティア団体など・その他

日 程

2008年9月27日（土）10：00
～28日（日）12：00

27日 事例の発表（ステージとポスターによる発表）

28日 前日の発表団体によるシンポジウムと総括

12：30から昼食と交流をかねた茶話会（500円会費高校生は無料）開催

内 容

ボランティア活動事例（子ども・高齢者・障害児者・環境・スポーツなど）の活動報告

方 法

- ①20分程度の報告（10事例）
- ②会場でのパネル展示（10事例）
- ③発表団体によるシンポジウムと総括

会 場

岐阜経済大学講堂

て行なうという形をとったことから、参加者が全ての報告を十分聞くことができなかつたこと、会場運営に走り回り実行委員は聞く余裕がなかつたこと、総括が不十分であったこと、地域住民の声や当事者の意見が反映されていないことなどの反省点が残った。

そこで、第二回大会は、①2日間の日程の全てを通して、1会場で開催し総括をすること、②交流会は多くの方に参加してもらうために昼食を兼ねたこと、③地域住民や当事者の声を反映するために、準備段階から実行委員へ参加してもらう方法をとった。また、昨年同様アンケートを行なったが、新たに「大学で地域福祉について学びたいと思いますか・ボランティア活動をする上で大学に望むことはありますか」という質問項目を加えた。

（アンケートの詳細は添付した資料を参照）

（2）大会実行委員会の運営と機能

3月に入り、実行委員会の構成、運営、機能についてボランティアサークルHIGE☆BUと検討を始めた。昨年の大会では岐阜経済大学学生のみで実行委員会が構成されたことから、地域ボランティア団体の実情を把握できないという課題が残った。そこで、今年度は、市民、高校生、当事者（障がい者）を実行委員に加え、市民の声を反映し、地域ボランティア団体の実情を把握しやすいようにした。

2008年4月19日に、第一回実行委員会が本大学 student plaza で開催された。岐阜経済大学ボランティアサークルHIGE☆BU、スポーツ経営学科学生、大垣桜高校学生、市民ボランティア4団体、当事者（障がい者）、大垣市社会福祉協議会ボランティアコーディネーター等27名（表1）が参集し、大会の目的について共有した。その後、企画、広報、会場・運営について昨年の大会を経験した学生から実行委員会の役割について具体的な説明がなされた。

月1回～2回のペースで実行委員会が開催され、各係りは活発に活動を始めた。企画係には、市民ボランティア4団体、当事者（障がい者）、大垣市社会福祉協議会ボランティアコーディネ

昨年の大会では、全体を3つの分科会に分け

第一回実行委員会の様子(2008年4月19日 student plaza に於いて)



第一回西濃地域ボランティア学習大会の開催内容や実行委員会の役割について学生が説明している

ネーターが加わることで、西濃地域で活躍するボランティア団体の情報を知ることができた。少人数でも地域の方に知ってほしい、頑張ってもらいたい活動団体や子ども・高齢・障がい・地域など広い分野からの発表を視野に入れて話し合いを進めた。

広報係は、案内状、チラシ、ポスター、当日配布冊子などの作成を行った。昨年の大会で実行委員を経験したメンバーが中心になり作業を進めていった。今回は、ポスターづくりをする際に美術部の協力が得られた。お互いのサークル活動の理解・協力の良い機会になったように思う。

会場・運営係は、高校生のメンバーを加えて、当日の受付、会場設置、運営、進行について詳細な打ち合わせを進めた。

昨年の大会では、大垣市社会福祉協議会の協力から得られたボランティア連絡協議会の名簿

情報に頼ることが多く、企画担当の学生が発表団体との調整に苦慮していた。今回は企画係に市民が加わったことで、大学には知り得ないボランティア活動や地域情報を得ることができ、連絡調整役も快く引き受けてもらえた。

(3) 参加団体の紹介

実行委員会メンバーに、市民や大垣市社会福祉協議会、当事者、高校生が加わり、多くのボランティア団体の参加を得ることができた。参加は18団体になり、講堂での舞台発表とポスター発表という二つの方法で開催した。

○講堂(7号館)舞台発表

	発表団体	テーマ
1	海津明誠高等学校	「ふくしの心」が育っています
2	つかいぼう	共に生きる社会をめざして
3	しらゆり会	上石津ボランティア活動
4	大垣桜高等学校福祉科	集めよう命のペットボトル ~800個で2人の子どもの命が救える~
5	できることを見つけ隊	「水」について考える
6	ニングルの会	いのちの大切さを朗読劇を通して共に考えよう
7	防災チュウチュウ隊	助けあいは大事でチュウ防災ファッションショー
8	揖斐高等学校生活環境科	ボランティアを通して得たもの ~地域とともに生きる~
9	ふるさと大垣案内の会	ボランティアガイドの町づくり

表1 実行委員会構成員

企画係	大会総括者(教員) HIGE☆BU代表 HIGE☆BU 2名 スポーツ経営学科1名	市民6名 大垣市社会福祉協議会1名(オブザーバー)	当事者(障がい者)1名	13名
広報係	HIGE☆BU 6名 美術部有志数名			6名
会場・運営係	HIGE☆BU 6名	高校生2名		8名

*当日は、ボランティアサークル HIGE☆BU 10名が協力した。

○講堂（7号館ロビー）ポスター発表

	発表団体	テーマ
1	南市橋杭瀬川の蛍を守る会	ふるさとの里地、里山は後世への最大の遺産
2	岐阜経済大学 ボランティアサークル HIGE☆BU	楽しむことから始まるボランティア
3	岐阜経済大学 スポーツマネジメントサークル	大学発信のスポーツボランティア
4	JA あいち海部助け合い組織	一人暮らしや認知、閉じこもり、うつなどの予防に向けての教室
5	サンビレッジ大垣	夏休みの自由研究「福祉を学ぼう」
6	JA あいち尾東けやきの会	食・農・健康による地域づくりの取り組み
7	JA 愛知東つくしんぼうの会	社会資源行政連携による地域福祉
8	FC 岐阜グリーンズ	スポーツボランティアの可能性
9	特定非営利活動法人と一たす	発達障がい支援～地域の理解と障がい児に寄り添う支援～

参加団体は、高齢者、障がい分野にとどまらず、環境、文化、食育、福祉教育と多岐にわたった。その内容を見てみると、高校からは海津明誠高等学校、大垣桜高等学校、揖斐高等学校の3校が、当事者からは身体障がいと発達障がい

関係の2団体が、高齢者福祉ボランティア関係からは2団体、児童関係からは2団体、環境文化防災関係は、4団体、福祉教育・啓蒙関係は、2団体、スポーツ関係からは1団体、食育関係からは1団体、地域連携関係からは1団体と総勢18団体のエントリーがあった。参加団体との綿密な打合わせ会議を重ねて当日を迎えた。実行委員は、夏休みを返上し発表冊子の印刷や大垣駅前での広報活動を自主的に行った。

2. 2008年西濃地域ボランティア学習大会の開催

多くの市民、当事者、学生が協力し、約半年間の会議を重ね当日を迎えることができた。発表内容を一部抜粋、加筆していくつかの事例を紹介してみたい。（詳細は2008年西濃地域ボランティア学習大会冊子参照）

（1）ステージ発表の事例

①揖斐高校「ボランティアを通して得たもの～地域とともに生きる～」

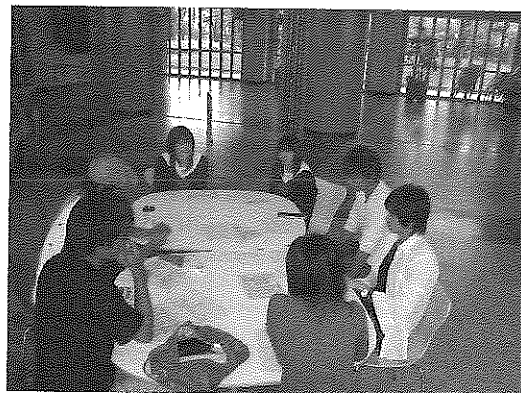
揖斐高校は「豊かでたくましい心と強靱な身体をつくり、知・徳・体の調和のとれた人格を養い、地域社会の向上に貢献できる人間を育てる」を教育目標に、地域に根ざした学校作りに取り組んでいる。平成16年度からは、連携型中高一貫教育をスタートさせ、地域とのつながりを深めている。

実行委員会の様子



企画係の打合わせ

市民・当事者・学生が活発な意見交換をしています

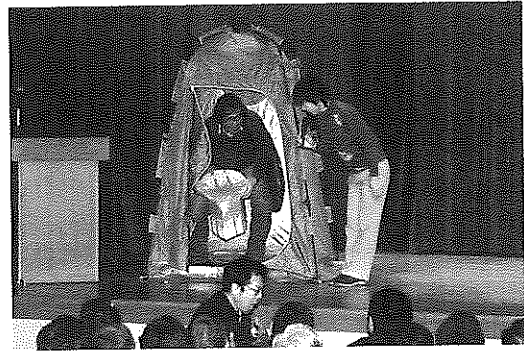


会場係の打合わせ

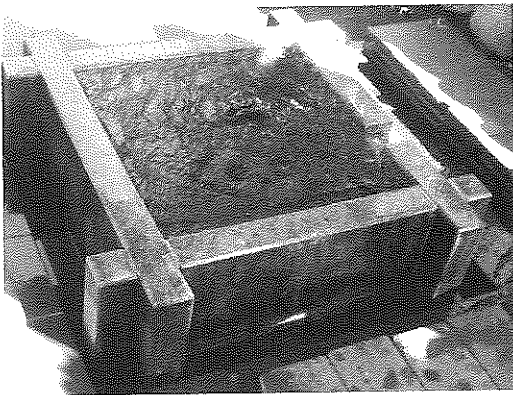
高校生・学生が会場運営について話し合いをしています



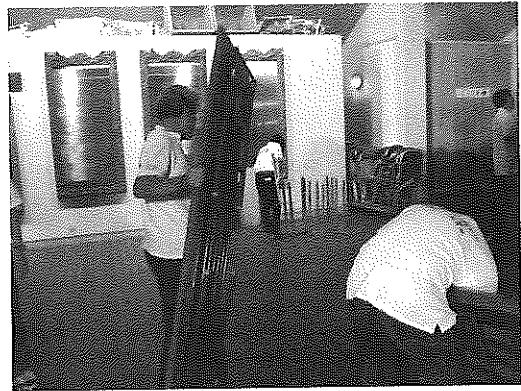
いび川マラソンでのボランティア
揖斐高校



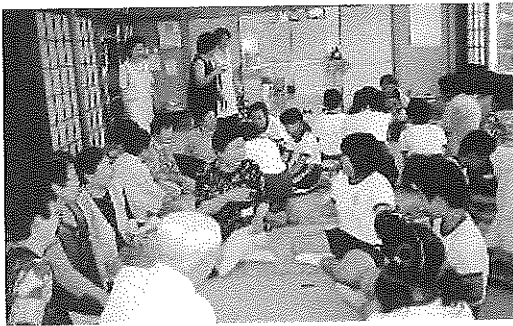
防災ファッションショーで簡易トイレを紹介
防災チュウチュウ隊



出来ることを見つけ隊 大垣市自噴水



FC 岐阜 グリーンズボランティア



子どもと高齢者の交流
JA 愛知東つくしんぼうの会



夏休み福祉教室
サンビレッジ大垣

そこで、さまざまな場面で、地域に働きかけるボランティア活動に全校をあげて積極的に取り組む様子の報告があった。ボランティアは、清掃活動や福祉施設での活動にとどまらず、地域の行事に積極的に参加している。4つの活動内容(生徒会の取り組み・学校家庭クラブ活動の取り組み・生活環境科の授業を活かした活動・有志を募っての活動)は、常に地域との共

生に着目し、地域住民とのつながりを大切にしている。

②防災チュウチュウ隊「助けあいは大事でチュウウ防災ファッションショー」

防災チュウチュウ隊は、大垣市の防災活動の推進に一役買おうと、平成19年度大垣市ボランティア市民活動支援センターが開催した『災害救援ボランティア養成講座』の修了生の有志が

集い結成した仲間である。近年の異常気象や東海・東南海地震の発生が危惧され、防災・減災活動はますます重要になってきている。防災チュウチュウ隊は今後、勉強会や研修会を実施し、防災にかかわる知識を身につけると共に、その情報をさまざまな形で啓発している。今回の発表では、子どもから高齢者までが、防災に関心を持ってもらうために「寸劇と防災ファッションショー」という形で伝えている。

(2) ポスター発表の事例

①サンビレッジ大垣「夏休みの自由研究～福祉を学ぼう～」

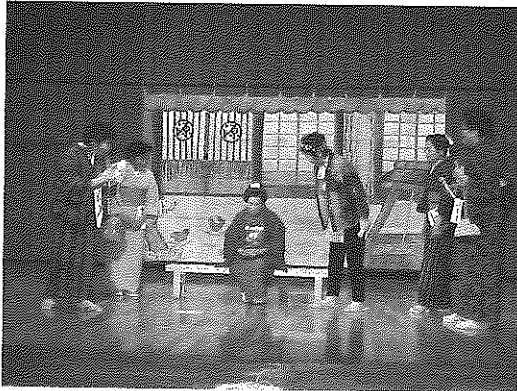
サンビレッジ大垣は、昨年引き続き二回目の報告になる。人がどんな障がいをもっても、安心して地域社会の中で暮らし続ける為には、医療や福祉サービスの充実やその人なりの人間

関係や地域との関係が維持されることが求められる。そのために、住民が障がいに対して理解を深め、差別や偏見がなくなるように、地元の中川小学校高学年児童に対して夏休み自由研究「福祉を学ぼう」という企画の報告であった。参加した児童が気軽に楽しみながら体験し、その中から「当たり前の生活」を考えられるプログラム（障がい体験・生活体験・支援理解）に工夫されていた。児童たちには、体験や理解を自分たちの言葉でまとめ、その成果を親たちへ発表する場もあった。

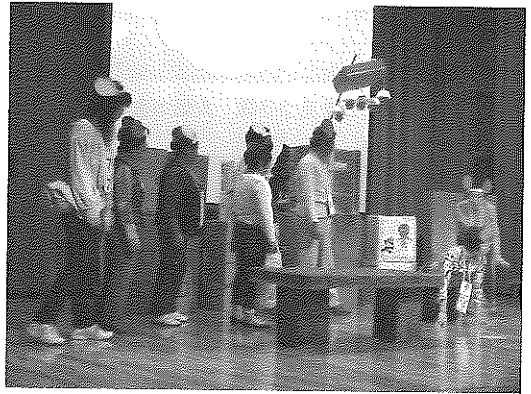
②特定非営利活動法人と一たす「発達障がい支援～地域の理解と障がい児に寄り添う支援」

NPO 法人と一たすは、自閉症に対する理解を広めるため、平成16年4月に「自閉症と地域をつなぐ会」(NPO と一たすの前駆団体) を立ち上げ、講演会・勉強会の開催、ホームページ・

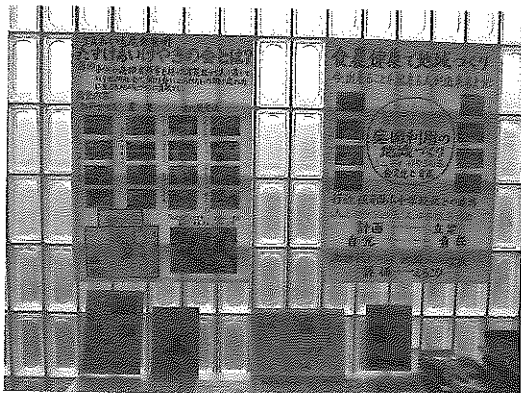
発表の様子



上石津ボランティア活動



防災ファッションショー



食・農・健康による地域づくりの取り組み



社会資源・行政連携による地域福祉

ブログの開設などによる一般の方々の自閉症等の発達障がいに対する理解を進めるとともに、実際に自閉症児に関わっている保護者、幼稚園、小学校、療育関係者に対する発達障がい者支援スキルアップ講座等を開催している。自閉症児を取り巻く同級生やその親、地域の人々が身近な自閉症児と係わり合いを持ち、自閉症の特性や対応への理解を深めつつ、支援の輪が広がり、地域づくりの基盤になるようにと継続的な勉強会、講演会、支援のためのスキルアップ講習会活動を行っている。また、学校や行政との連携も積極的に行い、子どもや親への相談活動も展開している。

(3) シンポジウム、総括

1日目の発表が終了し、翌日は記念講演、総括のためにシンポジウムを開催した。記念講演は「つながり～ボランティア～人との学び」というテーマであった。(今大会は、筆者が講師であったことからその内容の一部を抜粋して紹介したい。)

ボランティア活動は、必ず人との出会い、交流がある。「やってあげたい」気持ち優先し、活動する仲間やボランティアの対象となる人々たちを考えることを忘れがちになる。そこで、次の4点を心にとめて活動することが必要になる。

①対等であること

私たちは、どのような境遇であっても「自分

らしく生きたい」という思いを持っている。さまざまな生活環境が要因になって、価値観「物の見方や考え方」はひとり一人違うが、命に優劣や重さの違いはなく、誰も「その人の生き方や考え方」を非難する権利はない。ところが、いつの間にか差別や偏見を持っていることに気付く。ボランティア活動は、まず対等であることから始まること。互いの生き方や考え方を尊重し、出会った人の良さに気付き、共に目標に向かって活動するという「共生の心」を持つ必要がある。

②楽しむこと

どんなきっかけで始めたボランティア活動でも、継続するには自分から楽しむことが重要な視点である。楽しさは、他人が作ってくれるものではなく、自分が作り出すものであること。「ありがとう」「笑顔」は、人の心に「元気・喜び・安らぎ」を与えてくれるだけでなく、自己肯定感、達成感になり、自ら活動することの喜びにつながり、「楽しんでいる自分」に気付くことになる。

③学ぶ姿勢であること

人は生涯を通して学ぶ生きものといわれている。ボランティアを始めるには、ボランティア活動内容や方法を学ぶだけでなく、多くの地域社会の課題を発見することにもなる。活動内容を充実すること、新たな活動を創造すること、他のボランティア活動の理解を深め、連携することなど、ボランティア活動には学びがつきも

シンポジウムと茶話会の様子



シンポジウムの様子



茶話会でのレクリエーション

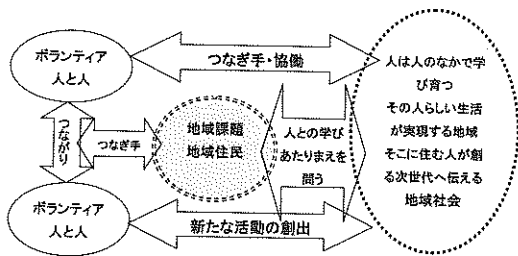
のであること。学びは、自己を成長させ、さまざまなストレスに打ち勝つ力を身につけることにもなる。

④振り返ること

とかくボランティア活動は、無責任、やりっぱなしといわれることがある。自己満足から自己実現へ向かうには、定期的な評価をして、効果や課題を整理すること。振り返りは燃え尽きを防ぎ、継続するためにも大切になる。ボランティア活動を振り返り目的を確認する仲間と共有する作業は「人と人とのつながり」を強化し活動が充実することにもなる。

これら4つの視点は「つながり～ボランティア～人との学び」であるボランティア活動が、人と人との「つなぎ手」としてソーシャルインクルージョンを目指した地域課題を解決する活動として、あたりまえが正しいことなのかを問うことになり、地域活動としてのボランティアになることを示している。(図1)

図1 地域活動としてのボランティアの可能性



その後、発表団体から11団体が参加して、記念講演講師(樋下田)、岐阜経済大学臨床福祉コミュニティ学科山田武司教員の二人がコーディネーターを担当しシンポジウムを開催した。そこでは、ボランティア活動を進めてく上での課題を出してもらった後、各団体から課題解決方法について意見を求めて議論を深めた。

そこでの課題を要約すると次のようになる。

一点目が行政、地域とのつながりである。どの部署とつながれば良いのか、自治会活動や地域住民とのつながりをどのようにすれば良いのか。二点目が会員の減少、特に若手会員の減少にどのように対応すれば良いかである。三点目が、教育機関、教員のボランティア活動へ対す

る姿勢がバラバラである。

これらの課題に対して各団体が創意工夫している方法や今後の対応への意見は次のような内容になる。「ボランティア団体が抱える悩みを聞く機関の必要性(社会福祉協議会以外の機関)」「教育や研修の充実(継続的な教育)」「地域課題を共有する仕組み作り(自治会や地域住民と話し合うことなど)」「イベントでない大会の実施(学びあうことができる大会)」「専門性のある研究との協働(教育機関、学校との協働活動)」などが出された。これらに対して大学が持つ機能を活かすには、研究者、学生が地域住民と共に地域課題に向き合い、研究と実践が循環する仕組みを創り上げていくことではないだろうか。

3. 大会の成果と課題

(1) 参加者アンケートからの考察

2008年度西濃地域ボランティア学習大会アンケート結果(105名が回答)

①大会に参加した方の性別は、女性81名、男性24名になっている。男女比は昨年同様女性が多いが、ボランティア活動への参加は、一概に男性が少ないとはいえないだろう。年代別やボランティア活動内容にもよると考えられる。

②参加した方の現在のボランティア活動状況は、94名は何らかの活動をしていると回答している。ボランティア学習大会への参加者のほとんどが活動への関心を持っていることがわかる。今後は、活動していない市民に関心を持ってもらえるような大会にすることが課題になる。

③ボランティア活動期間は、7年以上が40名で多く、1～3年未満が32名、3～5年未満が14名、5～7年未満が10名となっている。ボランティア活動を始めて5年前後が継続するかどうかの分岐点になるのだろうか。シンポジウムの課題にもあった「活動メンバーの高齢化、新会員の加入が少ない、振り返りの方法がわからない」などが要因になっているように思われる。ボランティア活動は比較的容易に開始できるが、理念の構築、継続という点においては壁を

乗り越えることが困難になっているのかもしれない。

④問3でボランティアをしていない方の今後の意向として、今後活動する予定22名、機会があれば参加したい15名、考えていない2名となっている。どのような活動をするかの質問はしていないため内容は不明だが、今後活動したいと思った参加者が22名いることに期待したい。機会があれば参加したいと考えている方への相談窓口などの整備が必要になるだろう。

⑤現在所属している団体の活動目標は、把握している59名、ある程度把握38名、殆んどしていない2名、全くしていない1名、考えたことがない2名となっている。

その中で、あまり把握していない方は、もっと把握したい16名、今のままで十分14名、把握する必要ない1名と回答している。ボランティア活動をする上で、団体の理念や目標を確認することは少ないだろう。改めて聞かれると知っているかどうか不安になってくるのではないか。

⑥ボランティア活動は地域状況へ対応しているかの回答は、十分対応している34名、ある程度対応している63名、ほとんど対応していない6名となっている。ある程度対応していると回答した方は、もっと地域状況へ対応すべき16名、今のままで十分8名、対応する必要ない1名と、再回答している。ボランティア活動と地域状況や地域課題との関係性について考えることが少ないのではないだろうか。

⑦所属活動団体の総括への間については、総括している37名、ある程度している58名、殆んどしていない2名、全くしていない2名となっている。ある程度総括していると回答した方は、もっと総括すべき15名、今のままで十分10名、総括の必要ない2名と再回答している。総括をどのように行っているかによって回答数が変わってくるが、1年に1回の総括をしてボランティア活動の現状や課題を整理することが必要になるだろう。

⑧所属ボランティア団体と他の活動団体との連携状況について、十分連携している25名、ある

程度連携している59名、殆んど連携していない13名、全く連携なし2名、考えたことない1名という回答になっている。その中で、連携が不十分と回答した方は、もっと連携すべき25名、今のままで十分10名と再回答している。連携はしていると思うが、連携内容や方法などを深く追求したことがないのではないだろうか。

⑨活動団体は財源確保をしていますかに対して、十分工夫している27名、ある程度工夫している50名、殆んどしていない12名、全くしていない10名、工夫しているか知らない5名と回答がある。その中の、財源確保が不十分と回答した方は、もっと工夫すべき12名、今のままで十分21名、必要ない4名となっている。ボランティア活動を始める際、ほとんどの団体の財源が十分でないといえる。財源確保は、継続性や若手ボランティア人員確保、地域課題への対応などと関係がある。

⑩ボランティア活動について家族と話すことはありますかに対して、よく話す36名、時々話す53名、殆んど話さない12名、全く話さない5名と回答がある。あまり話しないと回答した方は、もっと話をしたい17名、今のままで十分10名、話すつもりはない5名、無回答2名と再回答している。

同様の質問で友人や知人と話すことはあるかに対しては、よく話す33名、時々話す58名、殆んど話さない13名、全く話さない4名、無回答2名の順になっている。あまり話しないと回答した方は、もっと話したい10名、今のままで十分11名、話すつもりはない3名、無回答3名となっている。

また、近所の方と話すことはありますかに対しては、よく話す18名、時々話す46名、殆んど話さない22名、全く話さない17名と回答している。あまり話しないと回答した方は、もっと話したい19名、今のままで十分10名、話すつもりはない6名と再回答している。この問いは、相手が変わっても大きな違いは見られないが、近所との会話が一番少ない。ボランティア活動はしているが、自ら住む地域や起きている課題へ関心がないのか。たくさんのボランティアが

あっても地域で生じている問題が増えているのは、身近な人とのつながりやコミュニケーションが不足しているからだろうか。

⑪自治会活動へ参加していますかに対しては、積極的に参加している27名 ある程度参加40名、殆んど参加していない21名、全く参加していない3名の順になっている。参加が不十分と回答した方は、もっと参加したいが方法がわからない9名、今のままで十分30名、できれば参加したくない4名と再回答している。付き合い程度の参加が多く、今のままで十分であると思っている方が多い。ボランティア活動と自治会活動の連動が不十分であることが浮き彫りになった。

⑫近隣に住む他国籍の方と交流はありますかに対しては、よく交流する6名 ある程度交流する11名、殆んど交流がない32名、全く交流がない39名と回答している。あまり交流がない方は、もっと交流がしたい28名、今のままで十分26名、交流したくない4名と回答している。交流がないと回答した方が多く、今後も積極的に交流を深めようとは考えていない。交流したくない方も4名いる。ボランティアは何を目的に活動しているかを考えることが必要だろう。

⑬ボランティアを進める上で学習会などへ参加していますかに対しては、積極的に参加している28名、ある程度参加42名、ほとんど参加していない16名、全く参加していない2名の順になっている。あまり参加していない方は、もっと積極的に参加したい19名、今のままで十分27名と回答している。ある程度学習会に参加している方は、今後も積極的に参加する気はないと回答している。会員個々のモチベーションの違いは、団体の成熟に係る要因になるだろう。

⑭大会の内容はどうでしたか(複数回答可)に対しては、いろんな分野があり勉強になった73名、テーマを一つにしてほしい3名、テーマをもっと増やしてほしい2名、一つのテーマの時間が短かった6名、もっと気軽に聞ける内容にしてほしい4名、もっと専門的な内容にしてほしい1名の順になっている。

⑮大会の運営はどうでしたか(複数回答可)に

対しては、スムーズだった47名、パネル展示は良かった34名、実行委員の動きは良かった31名と回答している。

⑯参加した感想お聞かせください(複数回答可)今後の活動へ活かせる内容だった42名、活動を振り返る機会になった49名 多くの仲間に出会えた10名、活動のつながりができた5名、是非来年も参加したい21名、期待した内容ではなかった3名、日程を長くしてほしい0名、平日にしてほしい4名と回答している。

⑰大学で地域福祉を学びたいですかに対しては、是非学びたい19名、機会があれば学びたい52名、あまり学びたくない5名、学ぶつもりはない5名の順になっている。その中の、機会があれば学びたいと回答した方(複数回答可)は、時間が許せば学びたい21名、費用が安ければ学びたい13名、近所のサテライト教室なら学びたい21名、所属団体の活動に必要であれば学びたい15名と再回答している。あまり学びたくない、学ぶつもりはない方は、時間に余裕がない23名、経済的余裕がない8名と回答している。

⑱あなたは、ボランティア活動をする上で大学に望むことはありますかに対しては、ない26名、ある43名になっている。あると回答した方は、大学生と社会人(地域住民)と一緒にボランティアができるようにコーディネートしてほしい33名、大学が主導となって共に地域づくりをしていきたい12名、大学が持つボランティアの研究分野を公開してほしい15名、大学が得たボランティア情報を公開してほしい9名となっております。大学へ期待を寄せているのがわかる。

⑲大学への要望、意見、感想など(一部を紹介)

①ますますボランティアの輪が広がっていくことを願っている。

②講義を踏まえて、地域の実態に触れることが更に飛躍することであり、実践こそ理論を深めていく力だと思えます。

③一般の人の参加がもっとあるといいです。ボランティア活動をしている方々には頭が下がる思いです。大学と地域が一緒になってこのような大会が開かれたこと

に感動しました。

- ④今日はとても楽しかったです。「つながり」をテーマにボランティアコーディネーターをしているため大変勉強になりました。
- ⑤すごく充実した1日を過ごすことができました。実行委員会の皆さんがとても親切でした。
- ⑥地域へ出かけることは理解し合えていいことと思いました。大垣を愛する人が多くなることを期待したい。学生が若い力で大垣を明るく楽しい街にしてほしい。
- ⑦聴衆は参加団体が多く、一般人、大学生の参加、また、もっと当事者団体への参加の働きかけが大事である。
- ⑧大学生のボランティアに対する意識がこの経済大学から大きく声を上げて発展されることを願っています。

これらのアンケートから、一点目はボランティア団体の内部状況から、二点目がボランティア団体の外部状況から、三点目がボランティア団体と大学との協働からの三つの視点から考察してみる。

一点目はボランティア団体の内部状況を見てみると、「ボランティア団体の構成は、女性が多いこと、活動は地域課題に対応しているといえないこと、活動メンバーの高齢化、新会員の加入が少ない、振り返りの方法がわからない」点が共通していること。また、自身のボランティア活動について家族や友人、近隣と話すことが少なく、これからも話す必要がないと考えている人が比較的多い。

二点目の外部状況から見ると、「他団体との連携が困難、財源確保への関心が薄い、自治会活動への参加が少なく今後も参加したいと思っていない人が比較的多いこと、多国籍の方との交流はほとんどなく、今後も交流したくない人もいること、学習会への参加はしたい人が多いこと」となっている。

ボランティア活動を取り巻く動向は、平成18年は5年前の平成13年から2.7ポイント低下し

ている。1年間にボランティア活動を行った人は2,972万2千人、行動率は26.2%で40～44歳が33.6%と最も高く、25～29歳が15.8%と最も低いと報告されている²⁾。

ボランティア活動に関する団塊世代への意識について、一つでも今後は取り組んでいきたい活動があると83.9%が回答している。内容は、地域のゴミ拾いなどの環境美化、リサイクル活動・植物などの保護活動が56.5%、町内会や自治会などの手伝い、まちづくりなどの活動54.9%、地域の伝統芸能・伝統行事、祭り、スポーツやレクリエーションの指導などの活動が34.7%となっている³⁾。

また、「ソーシャル・キャピタルをめぐる内外の動き」の中でソーシャル・キャピタルを「信頼に裏打ちされた社会的なつながりあるいは豊かな人間関係」と捉えて、ソーシャル・キャピタルという新しい概念が、近年、世界的に注目を集めつつあり、ボランティア活動を始めとする市民活動の社会的意義についても、ソーシャル・キャピタルの培養という側面の重要性に目が向けられ始めていると認識している。ソーシャル・キャピタルと市民活動とは相互に影響しあい、高めあう関係にある。NPOがいわばコミュニケーションの場となり、ソーシャル・キャピタルの培養の苗床となる可能性がある。(例えば、「市民活動を行っている人は他人を信頼し、またつきあい・交流も活発な人が相対的に多い」「一方、他人を信頼する人やつきあい・交流の活発な人は市民活動を行っている人が相対的に多い」など。)ボランティア、NPO、自治会活動が盛んな地域は、犯罪が減少し、出生率が向上し、そこに住む人々は安心して生活しやすいと報告されている⁴⁾。

自発的な小さな芽から始まったボランティアをソーシャル・キャピタル、社会的意義のある活動へ、いかに導き、継続するかが大きな課題になる。そのためには、地域課題を把握し、向き合うことが必要になる。三点目のボランティア団体と大学との協働から、大学が持つ研究という機能をいかに活用するか、大学に突きつけられた課題ではないだろうか。

資本主義社会が不安定になり明るい未来や夢が描けない今日において、ボランティア活動が、社会的な評価、信頼を得ながら、地域社会において水平的でオープンなネットワークの形成を促進し、豊かな人間関係、つながりの循環を導くために、研究者、地域住民として何をすべきなのかを考える必要があるだろう。

(2) ボランティア学習の三つの側面からの考察

西濃地域ボランティア学習大会は、表題にもあるようにボランティア活動から学び合う「学習力」に着目している。その学習力は、三つの側面「自己の探求」として学生自身が自己を探求する側面を持つこと、「社会の探求」として社会を探求する側面を持つこと、「学びの探求」として学びを探求する側面である。

「自己の探求」とは、ボランティア活動を通して自分自身がどう変わっていくかということである。自分が何ものであるか分からない、自分を肯定的に見られない人が少なくない中で、ボランティアは生きる力を高める可能性を見出す活動といえるだろう。

興梠寛は、自分自身は何のために生まれ、何のために今存在し、どう生きていくかという自己との会話を重ねつつ、他者や社会、自然や環境と共に生きる、積極的な個、つまり閉鎖的な個でなくて、自らの自身の対話を重ねつつ、より開かれた個をライフスタイルや生き方の中で確立していくか⁹⁾が自己の探求の視点であると述べている。

「社会の探求」とは、ボランティア活動を通して社会の様々な状況から幅広い知識や柔軟な思考力を身につけることをいう。今やグローバル化へ突き進むなかで、価値の創造や人権について幅広い知識が必要になっている。ボランティアは、多様な人々と出会い、体験から知識を積み重ねる活動である。

「学びの探求」とは、ボランティアには常に学びが伴う。この学びから主体的に行動し、自律、他人への思いやり、感動や考える力を得ることが可能になる。それは、教育を学ぶ基本に

なるといえよう。

しかし、ボランティアをやれば良いというものではない。どんなボランティアをどんな方法で、そこで得た体験や気づきをどのようにして学習とするかが確立されていないと、三つの側面は意味を持たない。アンケート結果の繰り返しになるが、ボランティア活動が地域課題へ対応が不十分であること、自治会活動とのネットワークができていないこと、総括ができていないこと、ボランティア活動について話す機会が少ないこと、財源確保への関心が薄いこと、多国籍の方との交流はほとんどなく、今後も交流したくない人がいることなどから、三つの側面は機能していないといえる。ところが、学習会への参加し学びを続けていきたい思いは強いのである。

大学生のボランティア活動状況は、「ボランティア活動に参加したことがある(15歳～19歳55.3%)」「ボランティア活動に機会があったら参加したい(15歳～19歳72.7%)」という内閣府の調査報告がある。ボランティアをしましょう、ボランティア学習をしましょうと呼びかけるのはそろそろ終わりに時代にしなければいけない¹⁰⁾。

多くの地域住民がなんらかのボランティア活動を行い、小中学校では、福祉教育、生涯学習が進められ、文部科学省ではボランティアを学習指導要領に位置づけているが、若者の生きる力や人間力(知的能力要素、そして社会的・対人関係力要素、自己制御の要素を総合的にバランスよく高めることによって育まれる、社会を構成し運営するとともに、自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力:内閣府の人間戦略会議報告)は低下し、家庭や地域でのコミュニケーションの減少、つながりの希薄化、個人主義が謳歌する社会で私たちは危惧を感じながら生活している。まさしくボランティアが持つ「3つの側面」を機能させるような対策を講じる时候ではないだろうか。

(3) 今後の方向性

そのような中で、コミュニティ・サービス・

ラーニングが注目されてきている。コミュニティ・サービス・ラーニングとは、児童・生徒・学生が学校教育で学んでいる教科などのアカデミックな学問を地域社会の問題解決のために役立てたり、理論として学んだ成果を社会への貢献活動のために役立てたりしながら、自らの学問を検証したり深めたりする社会貢献型の体験学習である⁷⁾。

繰り返しになるが、ボランティア活動は、他人同士がいろいろな場でふれあい、つながりを持ち、お互いに学びあって生きる喜びを確かめ合う機会を与えるものであり、それが結果として社会の役に立つことになり、豊かで潤いのある社会づくりにつながる。同時に、ボランティア活動は、さまざまな知識・技術が身につく、いろいろな問題に直面してその解決方法を見出し、他人や自然を慈しむ心が育ち大きな教育効果を持つ。

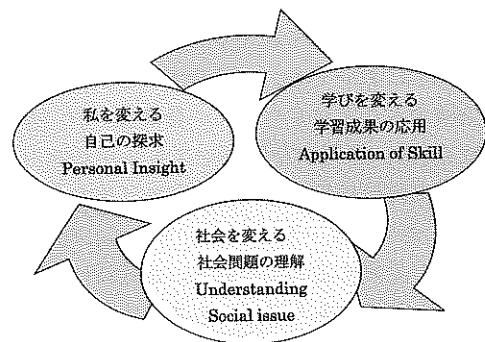
一方では、少子化社会の影響を受けて一部の私立大学では、定員割れが生じ、本大学においても同様の状況がみられる。そこで、これからは地域に求められる大学の独自性をアピールできる教育、地域が求める教育や活動のあり方を考え、実践する時期にきていると考える。また、4年間の大学生生活に目を向けてみると、自分の持つ力や可能性に気づかず、偏差値というレッテルを貼られたまま卒業する学生も少なくない。学生はボランティア活動を体験して自らの持つ力に気づき、自分を好きになり、自分の可能性、自分の生き方、地域社会を見る力を獲得することが可能になると思われる。

これまで、ボランティア活動は、特別な人々による活動、「弱者に対して何かやってあげる」と理解されていたが、阪神大震災などの自然災害等をきっかけとして、ボランティアをめぐる気運が急激に高まり、今、人々の意識の中にボランティア活動に参加することは、特別なことではなく当たり前のこととして定着してきている。

本学の教育理念は「自主と自由」「全人教育」「地域との共生」と、「地域に有為な人材を輩出する・有為な人材を育成する」という社会的

使命・教育目的であり、それは、「社会力」の豊かな人間を育てることである。これらの実情を踏まえて、行政や大学でもない第三者機関として、ボランティア活動に関わる知識や情報を提供する共に、ボランティアの学習機能を発揮する機関として、「コミュニティ・サービス・ラーニング」(図2)を設置し、地域社会(の住民や組織)、行政、大学(職員・学生)のネットワークワークを構築すると共に、必要な情報や教養を共有する必要があるだろう。

図2 岐阜経済大学コミュニティ・サービス・ラーニング



出所：昭和女子大学コミュニティ・サービス・ラーニングガイドブック7頁を修正し筆者が作成

「サービス・ラーニング」とは、学生が理論として学んだことを地域社会の中で実現化するための教科のひとつである。つまり実践型の教育プログラムを活用することによって、学びに対する姿勢や社会力の向上、地域社会のニーズなどの真の状況を学術的に置き換えつつ、それら地域社会の問題を解決したり、人々や社会に指摘したりしながら、あらためて自分がアカデミックな学問を学ぶ意味を再確認し深めるための、教科学習と社会貢献を融合させた互酬的な体験学習であるといわれている。すなわち、学習に対する姿勢や社会力の向上、学問的知識と地域社会のニーズの結合が期待できる。

同時に、ボランティア活動団体との共同の学びを共有する場面も多くなり、団体が抱える課題解決の方法にもなりえるだろう。やれば良いボランティアから参加型地域福祉、共生社会づくりへ進む時にきている。

アカデミックな学問と、ボランティア活動が持つ潜在的な教育力というものを結びつけていくことによって、新しい学びを創りあげていくボランティア活動が持つ教育力を確認し、新しい論理性や実践を切り開いていくことが必要ではないか⁶⁾。

大学も社会資源の一つとして、地域社会で起きている問題に対して主体的に取り組み、大学が持つ専門性を有効に発揮することが求められているといえる。今回の大会でも示されているように、大学に対する社会貢献への期待が高まっている。大学と地域とのプラットホーム機能を発揮するボランティアセンターやエクステンションセンターを設置する大学が増えてきている。

当大学においても、充実している大学の設備を公開することはもちろん、豊富な人材（学生や教職員）、専門的な知識やスキルを活用し地域課題を地域住民と共に解決する「岐阜経済大学コミュニティ・サービス・ラーニングセンター」を設置する必要がある。地域に開かれ、地域の人と学びあう学生、さまざまな活動を通しての地域課題の解決や社会変革を展開してこそ大学の存在意義、大学の理念が活かされてくるのではないだろうか。

最後に、2009年西濃地域ボランティア学習大会開催にあたり、ご尽力いただいた実行委員、大垣市社会福祉協議会、佐藤（俊）先生（本論の校正にも協力）、山田（武）先生はじめ多くの教職員の方に心から感謝します。

注

- 1) 「学生ボランティア活動支援・促進の集い」が2000年12月5日に、東京国際交流館 プラザ平成で独立行政法人 日本学生支援機能主催で開催された。そのなかで、興柁寛は、ボランティア活動の三つの潜在的学習について講演している。興柁寛 社会福祉法人世田谷ボランティア協会代表、日本ボランティア学習協会代表理事、昭和女子大学人間社会学部特認教授 コミュニティサービスラーニングセンター長
- 2) 平成18年度社会生活基本調査（総務省）
<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2006/gaiyou.htm>
- 3) ボランティア活動に関する調査報告書 国立教育政策研究所社会教育実践研究センターでは昭和22年～24年生まれの男女2,080人にインターネット調査を

している。2006年

- 4) 「ソーシャル・キャピタルをめぐる内外の動き」平成18年12月19日農村振興局が報告している。研究会は、委員長山内直人大阪大学大学院国際公共政策研究科教授、委員田中敬文東京学芸大学学長補佐、教育学部生活科学学科学科助教授、辻中豊筑波大学社会科学系教授、平岩千代子株式会社電通電通総研主任研究員、福重元嗣大阪大学大学院経済学研究科助教授からなる。山内は、その他にもソーシャル・キャピタルの論文を執筆している。
- 5) 興柁 寛 第10回全国ボランティア学習研究フォーラム東京大会 基調報告：「変化の時代のボランティア学習」2頁 日本ボランティア学習協会研究紀要第9号 2008年12月12日
- 6) 前掲書5 1頁
- 7) コミュニティ・サービス・ラーニングガイドブック 昭和女子大学コミュニティサービスラーニングセンター
- 8) 前掲書5 3頁

参考文献

- 1 稲葉陽二『ソーシャル・キャピタル』生産性出版 2007年5月
- 2 小國英夫編『社会福祉の再構築』ミネルヴァ書房 2008年3月
- 3 昭和女子大学コミュニティ・サービス・ラーニングセンターガイドブック
- 4 学生ボランティア活動支援・促進の集い総合資料 独立行政法人日本学生支援機構 2008年12月5日
- 5 ナン・リン『ソーシャル・キャピタル』筒井純也編訳 ミネルヴァ書房 2008年7月
- 6 読売新聞生活情報部『つながる 信頼でつくる地域コミュニティ』全国コミュニティライフサポートセンター 筒井書房 2008年9月

2008年 西濃地域ボランティア学習大会実行委員名簿

学 年	役 割	氏 名	所 属
2	実行委員長(総括)	小 田 純 樹	岐阜経済大学 HIGE☆BU
3	企画	藤 井 靖 高	岐阜経済大学 スポーツ経営学科
1	企画	岩 永 明 子	岐阜経済大学 HIGE☆BU
1	企画	渡 辺 愛	岐阜経済大学 HIGE☆BU
市民	企画	早 野 貞 明	大垣市民できることをみつけ隊 ボランティア
市民	企画	篠 田 稔	大垣市民できることをみつけ隊 ボランティア
市民	企画	須 藤 尚 章	大垣市民できることをみつけ隊 ボランティア
市民	企画	中 島 洋 子	大垣市民できることをみつけ隊 ボランティア
ボラ連	企画	西 田 松 代	ボランティアストーリー
ボラ連	企画	前 島 直 也	熊さんの会
ボラ連	企画	石 田 敏 江	大垣市母子寡婦福祉連合会
市民	企画	勝 野 輝 美	当事者(障がい者)
3	広報	高 田 美 幸	岐阜経済大学 HIGE☆BU
4	広報	幸 地 香 奈 子	岐阜経済大学 HIGE☆BU
4	広報	伊 藤 祐 子	岐阜経済大学 HIGE☆BU
3	広報	橋 本 将 志	岐阜経済大学 HIGE☆BU
2	広報	三 島 冴 加	岐阜経済大学 HIGE☆BU
2	広報	西 杉 山 裕 樹	岐阜経済大学 HIGE☆BU
2	会場・運営	植 田 裕 司	岐阜経済大学 HIGE☆BU
4	会場・運営	堀 あゆ美	岐阜経済大学 HIGE☆BU
4	会場・運営	谷 口 喜 一	岐阜経済大学 HIGE☆BU
4	会場・運営	渡 邊 貴 文	岐阜経済大学 HIGE☆BU
2	会場・運営	岡 本 遼	岐阜経済大学 HIGE☆BU
1	会場・運営	松 本 晃	岐阜経済大学 HIGE☆BU
高2	会場・運営	大 窪 真 央	大垣桜高校 福祉科(社会福祉部)
高2	会場・運営	三 輪 晏 那	大垣桜高校 福祉科(社会福祉部)

アドバイザー：竹中 望(大垣市社会福祉協議会ボランティアコーディネーター)

2008年 西濃地域ボランティア学習大会アンケート

このアンケートは、今後のボランティア活動や次年度の大会開催などの発展のために活用します。
 設問1～20まであります。設問3に回答した内容で記入する項目が若干違いますので、間違わないようにお願いします。
 下記の設問について、回答用紙の該当する番号のマークシートを塗りつぶしてください。

番号	質問内容	マークシートの番号	回答	内容
設問1	あなたの性別は	1	① 男 ② 女	
		2	① している ② していない	
設問3	あなたは現在ボランティア活動をしていますか	3	①と回答した人にお尋ねします。活動期間はどれくらいですか ① 1年未満 ② 1年～3年未満 ③ 3年～5年未満 ④ 5年～7年未満 ⑤ 7年以上	
		4	②と回答した人にお尋ねします。 ① 今後活動する予定である ② 機会があれば活動したい ③ 考えていない	
設問4	あなたは、所属する団体の活動目的を把握していますか	5	① 把握している ② ある程度把握している ③ ほとんど把握していない ④ 全く把握していない ⑤ 考えたことがない	
		6	③～⑤と回答した人にお尋ねします。 ① もっと把握したい ② 今のままで十分である ③ 把握する必要はない	
設問5	あなたは、所属する団体の活動が地域状況に対応していると思いますか	7	① 十分対応している ② ある程度対応している ③ ほとんど対応していない ④ 全く対応していない	
		8	③～④と回答した人にお尋ねします。 ① もっと地域状況に対応すべきだと思う ② 今のままで十分である ③ 地域状況に対応する必要はない	

設問6	あなたの所属する団体が活動を総括(評価・反省)していますか	9	<p>① 総括している ② ある程度総括をしている ③ ほとんど総括していない</p> <p>④ 全く総括していない</p> <p>③または④と回答した人にお尋ねします。</p> <p>① もっと総括すべきだと思う ② 今のままで十分である ③ 総括の必要はない</p>
設問7	あなたの所属する団体が他のボランティア活動団体と連携していますか	10	<p>① 十分連携している ② ある程度連携している ③ ほとんど連携していない</p> <p>④ 全く連携していない ⑤ 考えたことがない</p> <p>③~⑤と回答した人にお尋ねします。</p> <p>① もっと連携すべきだと思う ② 今のままで十分である ③ 連携する必要はない</p>
設問8	あなたの所属する団体が活動の財源確保の工夫(助成金・事業・バザーなど)をしていますか	11	<p>① 十分工夫している ② ある程度工夫している ③ ほとんど工夫していない</p> <p>④ 全く工夫をしていない⑤ 工夫しているが知らない</p> <p>③~⑤と回答した人にお尋ねします。</p> <p>① もっと工夫すべきだと思う ② 今のままで十分である ③ 工夫の必要はない</p>
設問9	あなたは、ボランティア活動について家族と話すことがありますか	12	<p>① よく話す ② ときどき話す ③ ほとんど話さない ④ 全く話さない</p> <p>③または④と回答した人にお尋ねします。</p> <p>① もっと話をしたい ② 今のままで十分である ③ 話すつもりはない</p>
設問10	あなたは、ボランティア活動について友人や知人と話すことがありますか	13	<p>① よく話す ② ときどき話す ③ ほとんど話さない ④ 全く話さない</p> <p>③または④と回答した人にお尋ねします。</p> <p>① もっと話をしたい ② 今のままで十分である ③ 話すつもりはない</p>
設問11	あなたは、ボランティア活動について近所の方と話すことがありますか	14	<p>① よく話す ② ときどき話す ③ ほとんど話さない ④ 全く話さない</p> <p>③または④と回答した人にお尋ねします。</p> <p>① もっと話をしたい ② 今のままで十分である ③ 話すつもりはない</p>

設問12	あなたは、自治会活動（祭りや運動会、ゴミ拾いなど）に参加していますか	21	<p>① 積極的に参加している ② ある程度参加している ③ ほとんど参加していない</p> <p>④ 全く参加していない</p> <p>②または③と回答した人にお尋ねします。</p> <p>① もっと参加したいが方法がわからない ② このままで十分である</p> <p>③ できれば参加したくない</p>
設問13	あなたは、近隣に住む他国籍の方と交流がありますか	23 24	<p>① よく交流する ② ある程度交流する ③ ほとんど交流がない ④ 全く交流がない</p> <p>②～④と回答した人にお尋ねします。</p> <p>① もっと交流したい ② このままで十分である ③ 交流したくない</p>
設問14	あなたは、ボランティアを進める上で学習会などへ参加していますか	25 26	<p>① 積極的に参加している ② ある程度参加している ③ ほとんど参加していない</p> <p>④ 全く参加していない</p> <p>②～④と回答した人にお尋ねします。</p> <p>① 今後はもっと積極的に参加したい ② このままで十分である ③ 参加したくない</p>
設問15	大会の内容はどうでしたか（複数回答可）	27	<p>① いろんな分野があり勉強になった ② テーマをひとつにしてほしい</p> <p>③ テーマをもっと増やしてほしい ④ 1つのテーマの時間が短かった</p> <p>⑤ もっと気軽に聞ける内容にしてほしい ⑥ もっと専門的な内容にしてほしい</p>
設問16	大会の運営はどうでしたか（複数回答可）	28	<p>① 会場進行はスムーズだった ② パネル展示は良かった ③ 実行委員の動きは良かった</p>
設問17	大会に参加した感想をお聞かせください（複数回答可）	29	<p>① 今後の活動へ活かせる内容だった ② 活動を振り返る機会になった</p> <p>③ 多くの仲間に出会えた④ 活動のつながりができた ⑤ 是非来年も参加したい</p> <p>⑥ 期待したほどではなかった⑦ 日程を長くしてほしい ⑧ 平日にしてほしい</p> <p>⑨ その他</p>

設問18	あなたは、大学で地域福祉について学びたいと思いますか	30	<p>① 是非学びたい ② 機会があれば学びたい ③ あまり学びたくない ④ 学ぶつもりはない</p> <p>②と回答した人にお尋ねします。(複数回答可)</p> <p>① 時間が許せば学びたい ② 費用が安ければ学びたい ③ 近所のサテライト教室なら学びたい ④ 所属団体の活動に必要であれば学びたい ③または④と回答した人にお尋ねします。(複数回答可)</p> <p>① 時間に余裕がない ② 経済的余裕がない ③ 費用対効果の面から学ぶに値しないと思う ④ 大学の講義は現場では役立つとは思えない</p>
設問19	あなたは、ボランティア活動をする上で大学に望むことはありますか	34	<p>① ない ② ある</p> <p>②と回答した人にお尋ねします。大学にどのようなことを望みますか (複数回答可)</p> <p>① 大学生と社会人(地域住民)と一緒にボランティアができるようにコーディネートしてほしい ② 大学が主導となつて共に地域づくりをしていきたい ③ 大学が持つボランティアの研究分野を公開してほしい ④ 大学が得たボランティア情報を公開してほしい</p>
設問20	大学への要望、意見なども含めて、自由なご感想をお聞かせください		

